女人和歌大系

近代期後編

長澤美

長澤美津編

女人和歌大系

第六卷

風間書房

昭和53年9月5日　印刷
昭和53年9月15日　発行

女人和歌大系　第六巻

定価　一一、〇〇〇円

編者　長澤美津
発行者　風間歳次郎
印刷者　千葉昭男

発行所
株式会社　風間書房
〒101東京都千代田区神田神保町一の三四
振替東京一―一八五三番
電話(二九一)五七二九番

(有朋製本)

(分)3092―(製)780500―(出)0925

凡例

一、明治三十年より昭和二十年迄の女性歌を標準に大系つけた。
二、明治革新以後大正期・昭和前期の間に歌集を刊行した女性歌人を対象とした。
三、主として処女歌集により、なるべく初版本を基準とした。
四、順序は歌集出版の年月によった。
五、物故者の歌数は多く、現存者は最小限にとどめた。
六、女人和歌大系中の最終編で近代後期を独立した一巻として編集した。但し近代編としては前編・後編二編を合せて成立する。
七、主要歌人であってもこの期間に歌集刊行なきは割愛した。

「女人和歌大系全六巻いよいよ完成」と、こう一行に書けば、この事実をとりあえず客観的に伝えることになるが、この事態をさらに主観的に考えると、これは、「女人和歌大系、全六巻、いよいよ完成」というように、ゆっくりと読むことが適当ではあるまいか。そして「いよいよ」のあとへ、「首尾よく」ということばを加えたい気がするのである。

それは、この『女人和歌大系』と題するものの実体が、久しい和歌の歴史の上で、さまざまな階層の女性の文化的位相をあきらかにしようとした最初の企画であり、そのどっしりとした大冊の全六巻を合わせると、無慮五千ページ以上に達することは、量において、まず驚異的であると同時に、その質においては、じつにゆきとどいた研究調査が遂げられて、まことに信頼すべき文献資料となったのである。これは、著者にとって、多年にわたる意図と用意の発揚であるとともに、また刊行者にとって、ないし同一課題の追尋を念とする待望者、利用者にとって、それぞれに、相互に、ひとしく祝意と敬意と謝意とを述べあうべき契機でなければならない。

記紀に伝えられた古代の歌謡にはじまって、万葉集から勅撰集へ、歌合、日記類、私歌集へ、そして近世から明治大正昭和にわたる近代へ、この系列は、およそ誰しも考え到るはずのことであろう。そこでまず、カード式によって整理に着手する。この作業は、作品を作者別に収集するというだけのことならば、根気よく書写を進めることによって、いちおうまとまるもののようにみられるかも知れない。ところが、その採るべき原典の実情は、特に、勅撰時代において、作者の署名方式が一定せず、それを整理してからでないと、作品の区分に混乱が起こる。その点は、第一巻に寄せられた序文の中に、久松潜一博士が懇切に指示されたところで、著者は、日本女子大学以来の恩師の指導に従い、すなおに、そのことから手を著け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たとみられる。それが作者の地位の類別、伝記の探求となり、必要な年表、図表の作製となって、その確実な基礎資料の上に、独自の論考が構成され、第四巻の研究篇として、学界に提出されたわけである。それも、これも、いわば青春の記念として、執念一途の発程が、前人未踏のライフワークともなったのである。

顧みれば、第一巻の発行が昭和三十七年十一月であり、「女人短歌会」の発起運営以来およそ十年間の準備をかさねたことになるが、それから三年の間隔をもって第四巻までが世に送られ、さらに近代の前期後期の両巻まで、それには六年の日子が費された。これは、その内容について、作者と歌集選定との規準等に関し、古典とはまた別の考慮を払うべき事情に対処しつつ、著者としては、そぞろに勅撰集の選者の労苦をも回顧したはずであり、近代の期間を終戦の昭和二十年までとしたことも、現代の歌壇的情勢において、適当な判断であったと認められる。

いま、全六巻の完成にあたり、もし久松博士が在世ならば、いかに喜んで跋の一文をも寄せられることであろうと思うにつけ、その代筆の草稿のつもりで、拙いものながら著者へ送ることとしたのは、「女人短歌会」結成当時の会合に招かれて列席した縁故もあり、多年の交遊を忘れ難いものとする微意の一端と受けとっていただきたい。

一九七八年四月

土岐善麿

跋

——女人和歌大系完成によせる——

時代	江戸時代			近代		
期	私家集期			前期	後期	
天皇	光格	仁光	孝明	明治	大正	今上
西歴	一八〇四 一八一七	一八一八 一八四五	一八四六 一八六七	一八六八 一九一一	一九一二 一九二五	一九二六 一九四五
年号	文化 文政	天保 弘化	嘉永 安政	万延 文久 元治 慶応	明治	大正 昭和

主要女歌人

(1877) 矢沢孝子 (1958)
(1878) 片山広子 (1957)
(1878) 与謝野晶子 (1942)
(1879) 山川登美子 (1909)
(1880) 茅野雅子 (1946)
(1881) 杉田鶴子 (1957)
(1883) 高安やす子 (1969)
(1885) 四賀光子 (1976)
(1885) 北見志保子 (1955)
(1886) 久保田不二子 (1965)
(1886) 三ケ島葭子 (1927)
(1887) 津軽照子 (1972)
(1887) 川端千枝 (1933)
(1888) 原阿佐緒 (1970)
(1888) 若山喜志子 (1968)
(1889) 岡本かの子 (1939)
(1890) 今井邦子 (1948)
(1891) 杉浦翠子 (1960)
(1891) 水町京子 (1974)
(1898) 栗原潔子 (1965)
(1898) 川上小夜子 (1951)
(1898) 中原綾子 (1968)
(1899) 阿部静枝 (1974)

現存者（一九七八・二）

竹尾ちよ (明26)　清水千代 (明26)　五島美代子 (明31)　君島夜詩 (明36)　生方たつゑ (明38)　長沢美津 (明38)　真鍋美恵子 (明39)　井戸川美和子 (明41)　斉藤史 (明42)　遠山光栄 (明43)　井伊文子 (大6)

作者別
時代別

女人和歌大系　第六巻（近代期後編）

目　次

土岐善麿

跋
凡例
図表
近代期（後編）主要女歌人図表……図一
第一篇　明治後期（三十年―四十五年）の女性歌集……一
第一章　概　説……三
第二章　歌　集……九
与謝野晶子「みだれ髪」「小扇」「曙染」（合著恋衣より抄出）……九
「舞姫」「夏より秋へ」
茅野雅子「みをつくし」（恋衣より抄出）「金沙集」……六〇
山川登美子「白百合」（恋衣より抄出）
「白百合拾遺・以後」稿本「花のちり塚」……八三
四賀光子「藤の実以前」「藤の実」……一三八
白岩艶子「釆風」……一四四

矢沢孝子「雞冠木」……一四八

第二篇　大正期の女性歌集……一六一

第一章　概　説……一六二

第二章　歌　集……一六八

岡本かの子「かろきねたみ」「わが最終歌集」……一六八
原阿佐緒「涙痕」……一八三
水町京子「不知火」……一九四
今井邦子「片々」「光を慕ひつつ」……二〇一
若山喜志子「無花果」……二一
片山廣子「翡翠」「野に住みて」……二三
杉浦翠子「寒紅梅」「藤浪」……二五五
竹尾ちよ「梨の花」……二七四
三ヶ島葭子「吾木香」（一、雑木集　二、青煙集）……二八〇
中原綾子「真珠貝」……二九三
高安やす子「内に聴く」……二〇六
津軽照子「野の道」……二二五
阿部静枝「秋草」……二二七
杉田鶴子「菩提樹」……二三七
（付）灰燼集女性歌抄出……二五二

第三篇　昭和前期（元年―二十年）の女性歌集……二六一

第一章　概　説……二六二

第二章　歌　集……三六九

北見志保子　「月光」……三六九
長沢美津　「氾青」……三七八
川端千枝　「白い扇」……三八八
久保田不二子　「苔桃」……四〇二
栗原潔子　「寂寥の眠」……四一三
清水千代　「白木蓮」……四四九
君島夜詩　「韓草」……四六五
生方たつゑ　「山花集」……四七五
五島美代子　「暖流」……四九二
井伊文子　「中城さうし」……五一二
斉藤史　「魚歌」……五一九
井戸川美和子　「旅雁」……五三二
倉地与年子　「白き征矢」……五四四
遠山光栄　「杉生」……五五九
真鍋美恵子　「径」……五七二
川上小夜子　「朝ごころ」……五八三
（付録）
松本初子　「藤むすめ」……六一八
梶原緋佐子　「逢坂越え」……六二六
大井重代　「山茶花」……六三八
菅野清子　「風花」……六五三
近江満子　「紫に咲く」……六六八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

付録

系統図……六九四
近代後期女歌人一覧表……六九六
作者略伝……六九八
索引……七〇五
作者（関連者）名……七〇七
書名……七一〇
あとがき

第一篇　明治後期（三十年―四十五年）の女性歌集

第一章　概　説

短歌革新とあさ香社

明治二十九年九月の「歌学」に載せられた落合直文の文中に「歌は目にて見るべきものなるか、耳にて聞くべきものなるか」という一節がある。直文は歌を作り歌論もした。その歌論はそれまでに称えられた和歌改良論と違って理論がたち同時に清新な作品を伴っていた。

直文は文久元年（一八六一）宮城県の杉岩村なる現在の気仙沼市の鮎貝家に次男として生れた。落合直亮が仙台に中教院を設立しており、直文はそこに学んだ縁により十四歳の時落合直亮の養子となった。直亮が伊勢神宮の弥宜となったとき伊勢に従い、十四年には上京して東京大学の古典講習科に学び、二十二年二十八歳で皇典研究所の教師となり、翌年第一高等学校の教師となった。

「歌学」を発行したのは二十五年（一八九二）三十二歳のときである。あさ香社を結んだのはその翌年である。ここに集った人達によって和歌の革新はなされ、まさに直文は明治の和歌の革新の原動力となった。

直文が歌の会を設けたのは大町桂月・塩井雨江・国分操子など早く師事した人達によってである。内海月杖、伊藤正弘・鮎貝房之進（直文実弟、槐園）与謝野鉄幹らが加わり、革新的機運がかもされて来たことにより、居も本郷掃除町から浅香町に移されあさ香社と命名されたのであった。会員は二十名から四十名余りに及び、婦人も十七八名参加している。

詠草は新聞「日本」「自由新報」に発表され、特定の歌誌は持たなかった。鉄幹が二十六年創刊された「二六新報」に入社したことによって最も多く同誌に発表されるようになった。この間に槐園は二十七年に朝鮮に去り、二十八年に京城に在って鉄幹を招いた。鉄幹は二六新報を退社して渡鮮している。二十九年三月帰京するが、あさ香社詠草の誌上発表はここで中絶となり、鉄幹は歌集『東西南北』を刊行し、三十年再び渡鮮して翌三十一年帰京。歌集『天地玄黄』の刊行となっている。

あさ香社詠草は二十五回、大体三百首程のものであるが、これがあさ香社としての唯一の短歌の記録となった。この中で直文の選んだものと、そうでないものとの区別はつけがたく、鉄幹の作が八十首を占めている。三十年四月直文直門の久保猪之吉・服部躬治・尾上柴舟らにより「いかづち会」が組織され、三十一年には大学、第一高等学校で直文に学んだ八杉直利・沼波武夫・木村義則（吉沢）らによって「わか菜会」が組織された。これらによってあさ香社は事実上の分裂期いにはったと見るべきである。

更にこの年に正岡子規が「歌よみに与ふる書」を新聞「日本」に

発表して、写実の立場を主張する先駆をなし、佐佐木信綱の「心の華」の創刊があり、井上通泰・池袋清風による新しい動きが生じている。

ここで直文の和歌についての考えをみるに、極めて自由な対し方をしている。歌体の上では短歌のみに執せず長歌も必要であり、古来の和歌に叙事歌の少いことを述べ、音数律に関しても特に歌詞としての制限を今なお守るべきかどうか、また歌語としては今様などを俗調としてそしる向きもあるが捨てがたく、単なる歌学者としての偏僻はさけなければならないとしている。晩年の講演記（筆の花三六年六月）によれば旧派と新派については自分も新派の一人であるが、短所をいったら旧派にも新派にもあり、長所をいったら旧派にも新派にもある。新旧の長所を互に取り集めて一つの完全な歌を拵えるのが、現今歌学社会に必要であるというまことに穏健なものである。

直文は三十一年ころより健康を害し三十六年十二月に四十歳で没している。三十二年に一高教授を退きこの年「国文学」（明治書院）を刊行主宰した。一貫して国文学上の広い見地から歌の固定化を破りつつ、その門下に向ったのであった。直文は自らの歌誌を持たなかったこと、その門下達が各々主張を異にして傾向を鮮明に掲げたことによって、まさに直文は革新の原動力に立ったことになったのである。

明星の出発

あさ香社で直文がなしたことは擬古派の短を除き新主情派短歌の方向を示したが、実作の指導者として臨んだのではなく、あくまで国文改良の一つとして短歌運動をすすめたのである。作歌上では槐園・鉄幹が熱心であり主力をなしていた。

しかし先に記した如くこの二人が韓国に去り、再び鉄幹が帰京した時は歌壇の様相は変化していた。三十二年十一月に鉄幹は「新詩社」をおこし発表の機関誌を持つことに踏み切った。翌三十三年四月に「明星」を発刊している。この結成にあたり有力な支えとなったのは雑誌「文庫」の歌壇投稿者と「浪華青年文学会」の機関誌「よしあし草」の同人であった。この「よしあし草」の同人中に堺五人組の一人といわれる河野鉄南があった。鉄幹は摂州遠里小野村安養寺に養子となったことがあり、堺の地は第二の故郷であった。五人組の他の一人河井酔茗とも親しくなり「よしあし草」十二号より歌壇の選者となっている。明星は第一号から第五号までの編輯兼発行人は鉄幹の最初の妻林滝野であった。第一号には落合直文をはじめとして、あさ香社の久保猪之吉・服部躬治らが参加しており、藤村の「旅情」と題する「小諸なる古城のほとり」も載っている。第二号には竹の里人の「病床十日」佐佐木信綱の「古郷」や金子薫園も出詠し、鳳晶子の「花がたみ」六首がある。第三号には鳳晶子「小扇」九首、山川登美子四首が見られる。第四号になると新詩社詠草なるものが歌数を加え、短歌誌としての色彩が濃くなり、第五号には登美子九首、晶子七首が「露草」と題して別欄に扱われている。第六号より編集発行人が与謝野寛となり、九号に至って発禁

にあっている。然し十号において発禁のあとをうけて却て「明星」の名声を高め世の同情と共鳴を得た結果を招いている。十一号は寛の西下のため発刊が遅れたことを、新聞「日本」に正岡子規によって、明星廃刊の誤伝となり、また「文壇照魔鏡」なる定期刊行を阻止する状態も生じたが、これまた逆作用として新詩社風の独自の表現様式を青年層にゆきわたらすという現象を呈した。

与謝野晶子

今年は晶子生誕百年にあたる。いま女性和歌を見渡して近代後期をとりあげるとき、この期の柱として与謝野晶子をあげることは、晶子自身が詠みのこしたように劫初より営まれた和歌の殿堂に黄金の釘を打ちこんだあとを辿ることになる。

前期の柱として樋口一葉をあげたが、この二人はまことに対照的な存在で、共に古典的教養を身につけて出発しているが、一葉は旧派の打ち止めであり、晶子は新派の発端をなしたというべきである。

晶子は明治十一年に堺の町のしにせ駿河屋なる菓子商の家に兄弟十人のうちの三女として生れた。早くも十二歳のころから姉の嫁いだあとをうけ帳面役を引きうけたという。それは商家のしきたりとして幼い時からの自然な経営参加を意味するものでもあろう。小学校を了え女学校に進むがその間に源氏物語を読み、八代集に親しみつつ、当時の文学雑誌「めざまし草」「文学界」「帝国文学」などを読み耽り、文学的開眼は充分になされていた。二十歳の時鉄幹の『天地玄黄』藤村の『若菜集』が出ており、堺の町では河井酔茗・河野鉄南・宅雁月らの発企で「浪華青年文学会」の支部が出来、晶子もそれに加わっている。鉄幹が選者となった「よしあし草」の十七号に晶子の歌が載り、「明星」一号からここにも作品を発表した。

やがて師弟の関係を越えて、意を決して上京して鉄幹と結婚することになるが、この間の周囲の制約を打ち破ってゆく自我の強さは大胆であり、その過程を結集した『みだれ髪』一巻は奔放に、情熱と恋愛を一気に詠いあげたものである。この集を成す期間は明治三十三年八月から三十四年六月迄の十ヶ月の短時日であって、実感が根底となった現実的感覚と巧緻な官能表現にみたされている。『みだれ髪』一巻は一人の女性がうたいあげた一歌集にとどまらず、在来の和歌に画期的な不滅の生命を与えた明治の代表歌集となった。

一葉が士族の娘として恋愛するにも家に、時代に制圧されたのにくらべて、晶子は封建制への見事な対決であり、伝統への激しい反逆であるが易々として実行した。これが単なる事件として、ことが終れば消滅するのではなく、その後の歌人としての成長のみならず、あらゆる面で偉大なる女性として六十三歳で生を閉じるまで前進をつづけたのである。

晶子は自論として歌話（大正八年）のなかに、真の芸術は法則から出発していない。歌は実感の表現であって、五句三十一音の制約はあるが、この二つの制約は客観的に規定されていることで窮屈ではない。感動を選択してうたうことである。自分はうたいたくない感動はうたわないし、類型的・伝習的・常識的・記述的な発想をし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com